

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和3年度 第2号 2021年11月26日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和3年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2021年11月16～18日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を大きく上回った。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は鹿部沖～苫小牧沖。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深450～550mにかけて強くみられた。ただし、魚群は海底よりやや離れた深度400m付近が中心であった。
- ・ 水温は、渡島沖、胆振沖ともに平年よりもやや高かった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて広く観察されましたが、その中でも渡島沖の188漁区および胆振沖の178、184漁区に強い反応がありました（図1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を大きく上回り、調査を開始した2001年度以降では、2009、2007、2013年度に続き4番目に高い値となりました（図3）。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～600mに観察されました（図4）。とくに、魚群反応が強かった鹿部沖～登別沖（F～Hライン）では、水深450～550m付近にまとまった反応がみられましたが、魚群は海底から離れて浮いており（深度350～450m付近）、海底に着いた反応は水深400～450m付近にみられただけでした。ただし、苫小牧沖（J～Kライン）では、水深400～500mにかけて海底に着いた強い反応がみられました（図2）。
4. 今年度は時化により調査期間が短縮されたため、トロール調査は実施できませんでした。代わりに、1次調査（8月下旬）以降に実施した漁獲物調査（底建網および刺し網）の測定結果をお知らせします。底建網（砂原沖）および刺し網（鹿部沖）で漁獲されたスケトウダラは、ともに体長（尾叉長）35～45cm主体で、40cm前後にモードがありました（図5）。これらの体長組成は1次調査でトロールにより漁獲されたスケトウダラの組成とほぼ同様であったことから、今後の漁獲物も尾叉長40cm前後が主体となると考えられます。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（Dライン沖）、胆振沖（Hライン沖）ともに、水深130～230mにかけては2～3℃、水深240～280mにかけては1～2℃、それ以深では水深500mまで0.4～1℃ほど平年（2002～2020年度のこの調査における平均値）を上回っていました（図6）。

なお、次回の調査は年明け後の1月中旬（2022年1月12～20日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

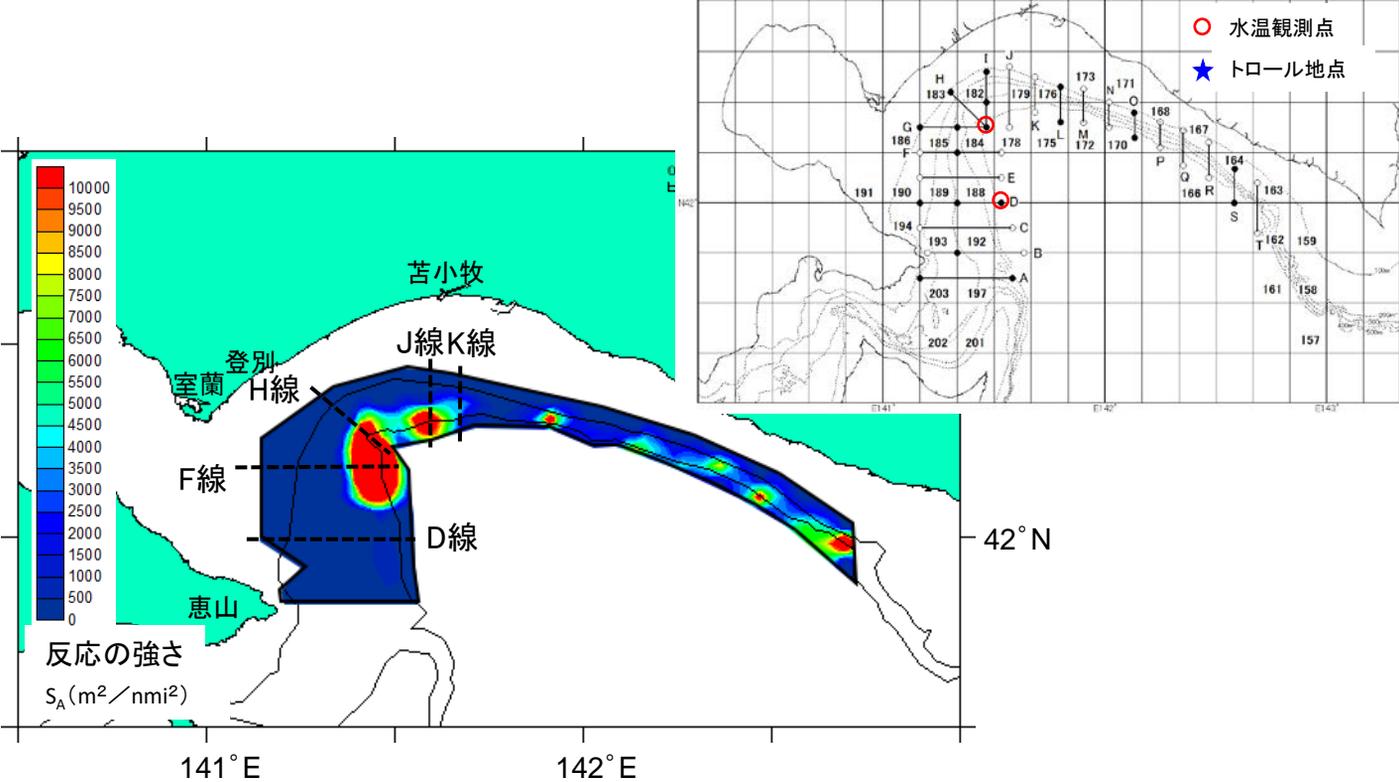


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

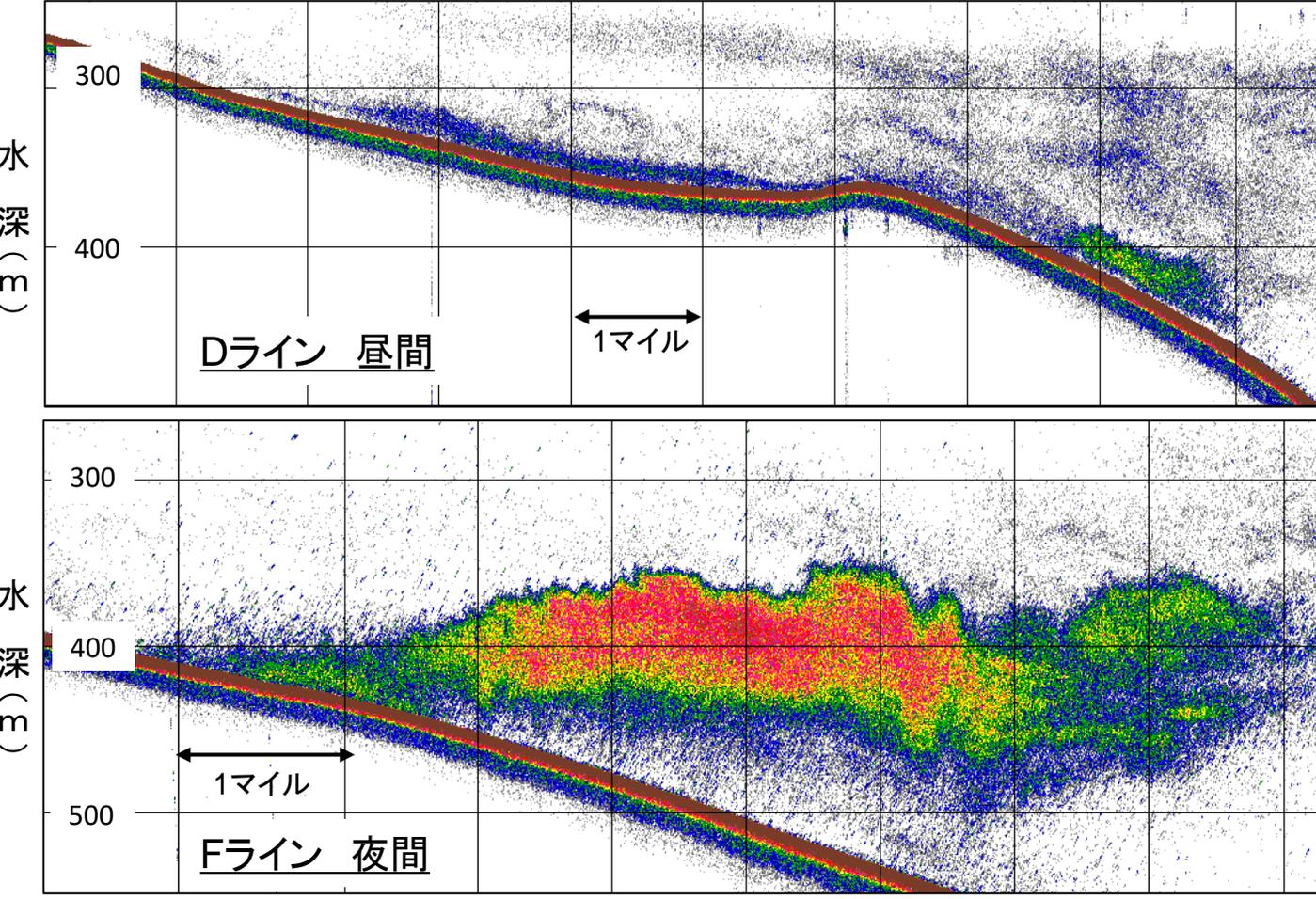


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

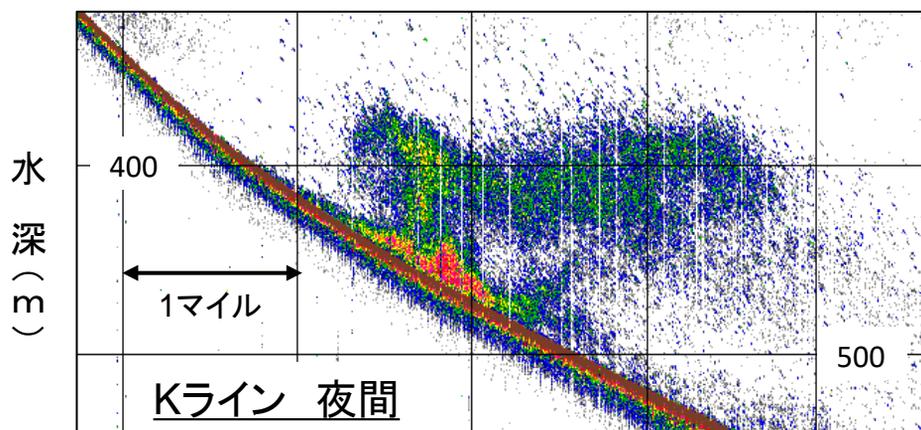
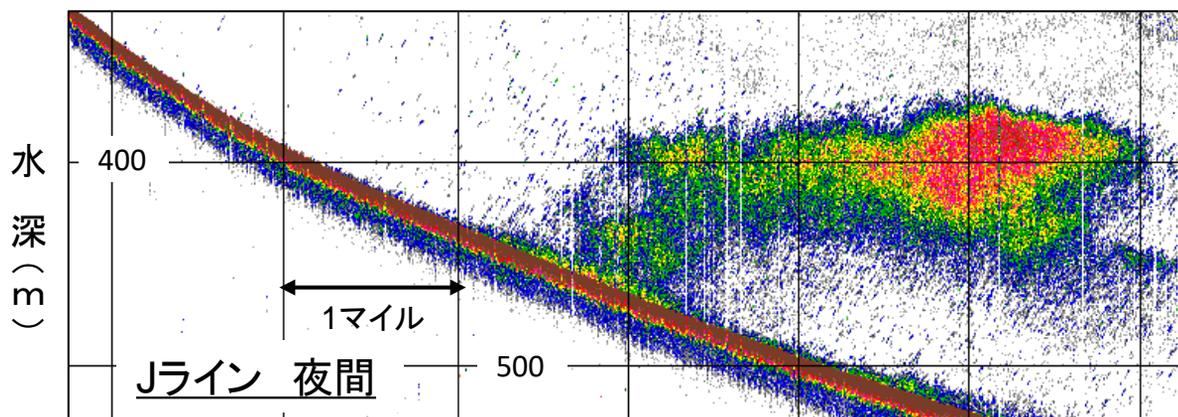
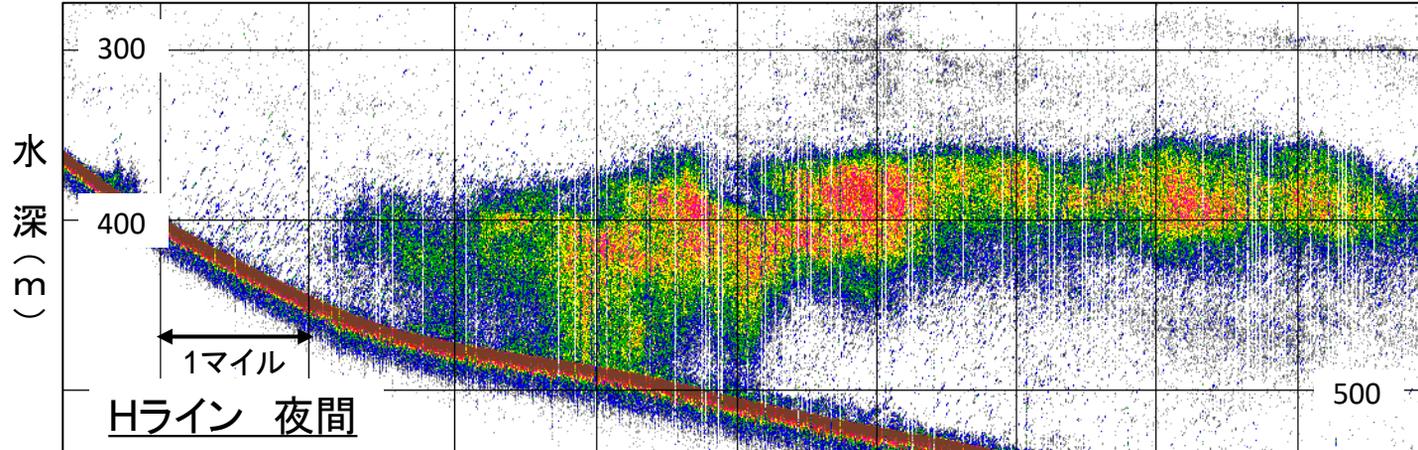


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

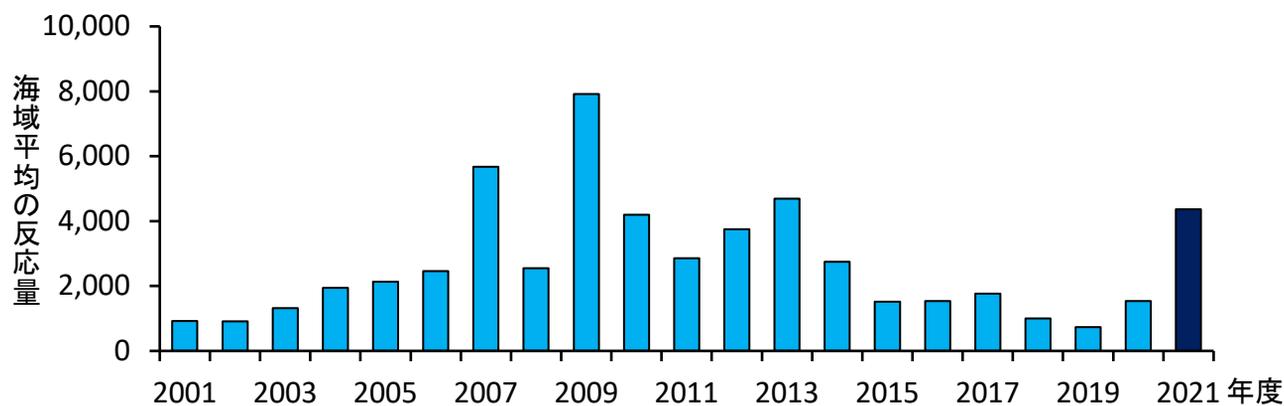


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移(1平方マイルあたりの反応量)

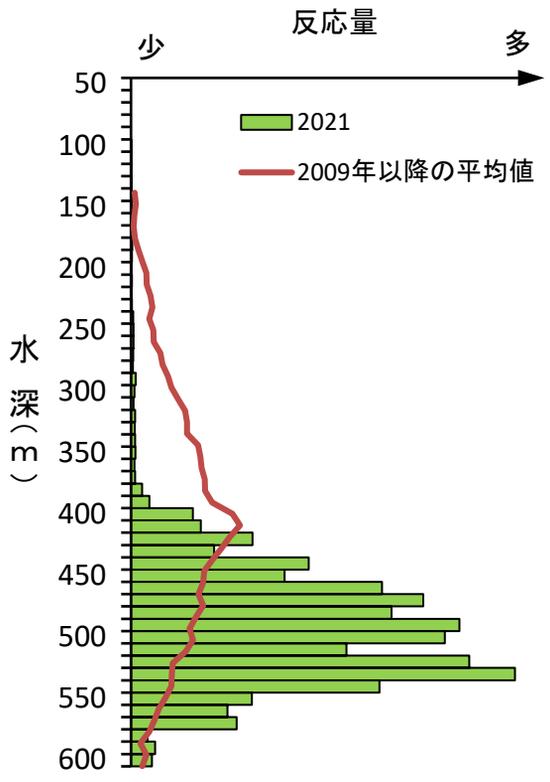


図4 水深別の平均魚探反応量(海域全体)

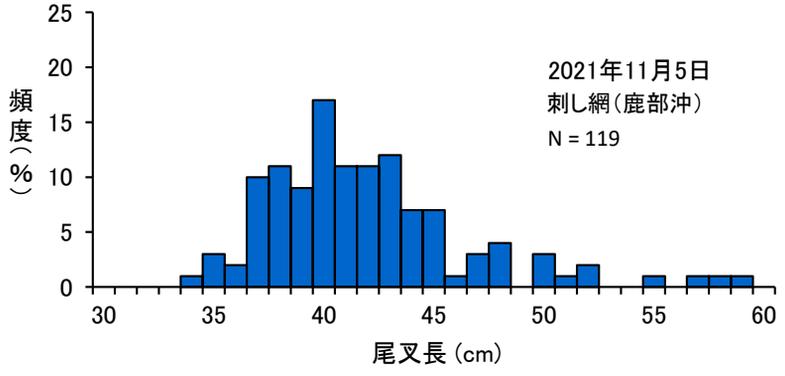
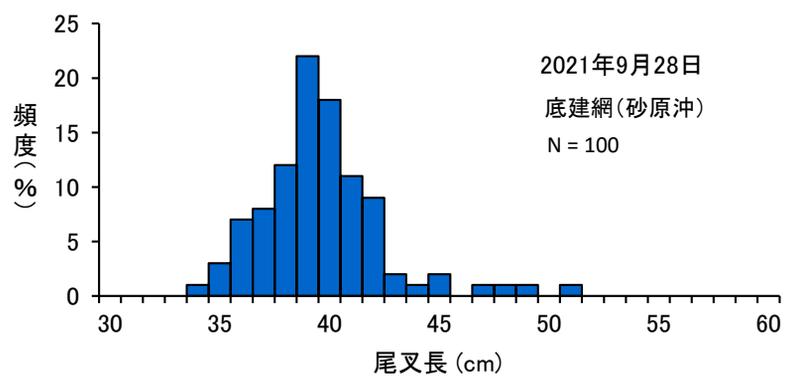


図5 スケトウダラ漁獲物の体長組成 (上:底建網,下:刺し網)

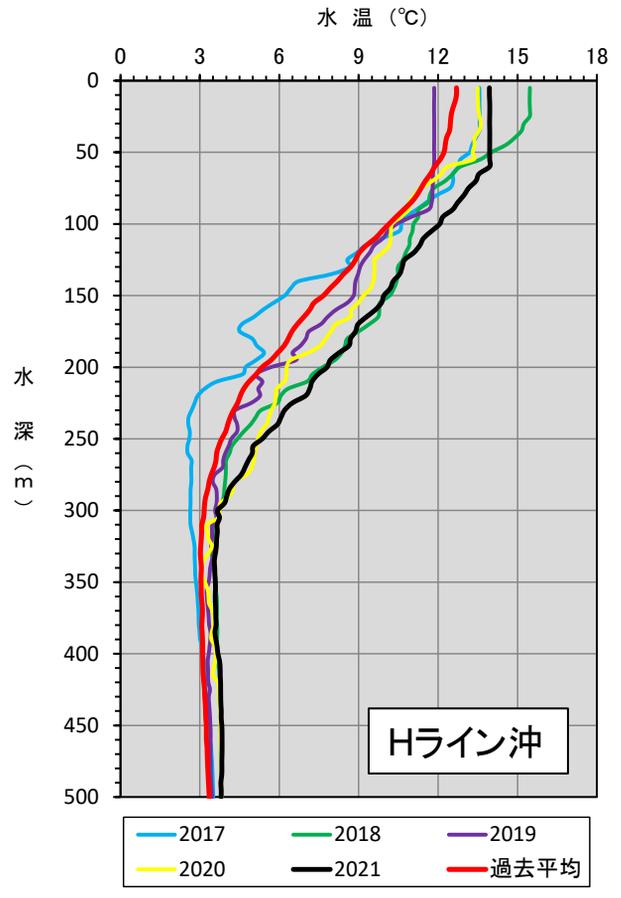
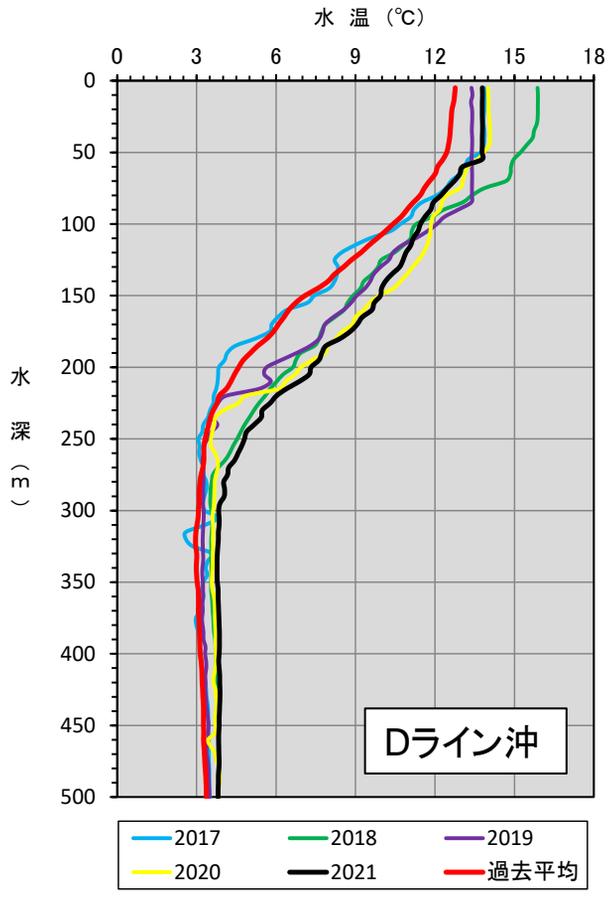


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左:Dライン沖(N42°ライン),右:Hライン沖(登別沖) (過去平均:本調査における2002~2020年度のそれぞれの調査点の平均値)